

所報 <Shoho>

川崎市総合教育センター

〒213-0001 川崎市高津区溝口 6-9-3

《TEL》044-844-3600

《代表メール》88csomu@city.kawasaki.jp

《ホームページ》https://kawasaki-edu.jp/

“ふつう”を超えて

—多様性の包摂から始まる教育のマインドチェンジ—



日々の学校生活の中で、何気なく使っている「ふつう」という言葉。「ふつう」の授業、「ふつう」の子どもたち。この「ふつう」の中にどのような子どもたちの姿がイメージされているでしょうか。

現在、川崎市では、特別な支援を必要とする児童生徒の数が年々増えています。2024(令和6)年度には総合教育センター特別支援教育センターの新規相談者は788人でしたが、2025(令和7)年12月時点で850人を超えました。

この現状は、これまでの指導体制や学校の仕組みだけでは対応が難しくなっていることを示しています。そして同時に、私たち自身が「ふつう」を見直し、意識を変える必要があることも教えてくれています。

1980年代にアメリカの建築家ロナルド・メイスが提唱したユニバーサルデザイン(以下「UD」という。)は、障害の有無にかかわらず、すべての人が安心して利用できる空間や仕組みを整えることを目指しました。

日本でも、1990年代後半からUDの考え方が広がり、教育分野では2007(平成19)年の特別支援学校制度や2011(平成23)年の障害者基本法改正をきっかけに、インクルーシブ教育システム構築の理念とともに浸透してきました。

また、2017(平成29)年改訂の学習指導要領では、「年齢に応じて少しずつ自己理解を深め、その上で自分の得意を生かし、苦手なことを乗り越える力を身に付けられるようにすること。さらに、自己理解だけでなく、状況に応じて適切に行動できるように指導することも重要である」と示されました。加えて、障害のある子どもが十分に学ぶための合理的配慮とともに、交流や共同学習が明確に位置づけられました。

さらに、次期学習指導要領の論点整理では、「主体的・対話的で深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性の確保」の三つの柱が示され、中でも、「多様性の包摂」が掲げられたことは重要なことと捉えています。これは、一人一人の特性に応じて学び方を選べる環境を整えながら、他者との協働を通じて社会性

を育むことを意味しています。人によって、音声から考えることが得意な人、文章を読んで理解するのが得意な人、図を見てから考えた方が理解しやすい人など、学びの獲得の仕方は人それぞれです。

この学びを支えるための環境整備として、例えば、ICTを活用して文章を読み上げる機能や、拡大、翻訳などの機能を整えることなどが挙げられます。特に、生成AIの発展は、より多くの機能を充実させることとなり、一人一人の学びの保障は格段に変わってくることでしょう。

しかし、制度や技術が高まり、環境整備が進んでも、かかわる人の意識が変わらなければ、本当の意味での「多様性の包摂」とは言い難い。やはり、最も大切なのは、私たちのマインドチェンジなのではないでしょうか。

ここで「ふつう」という言葉を改めて問い直してみますと、「ふつう」とは、人数の多さで決めるものもなく、誰かと比較するための尺度でもありません。多様性そのものを「ふつう」の状態として捉え、一人一人の違いが自然に受け入れられる。そんな教育文化こそが、これからの「ふつう」になっていくことが求められていると考えます。

誰もが学べる環境を目指して、みんなで知恵を出し合いながら多様性の包摂を実現した未来では、もはや「ふつう」という言葉は不要になっているかもしれません。

令和7年度『所報』第2号

【巻頭言】“ふつう”を超えて……………	1
カリキュラムセンター……………	2
情報視聴覚センター……………	3
教育相談センター……………	4
特別支援教育センター……………	4

令和8年度スタート「第3次かわさき教育プラン」 Key Project 1 探究的な学びの充実

「第3次プラン」では、「Key Project 1」として「探究的な学びの充実」を位置付けています。「総合的な学習（探究）の時間」を中心に、子ども主体の「探究的な学び」を、学校と地域が一緒になって進めていくことで、子どもたちの資質・能力を高めます。

◆社会参画に向けた資質・能力を育成する探究的な学びの充実

なぜ、「探究的な学び」の充実を目指すのですか？

変化が激しく将来の予測が困難な時代を自らの力で生き抜いていくためには、「自分（たち）で考え、解決していく学び」が重要であり、「第3次川崎市教育振興基本計画かわさき教育プラン」で「めざすもの」として示された「一人ひとりが輝き、共に未来をつくる」の実現に向けては、自ら地域・社会に関わり、課題を見つけ、他者と共に考え、解決していく「探究的な学び」を充実させる必要があります。

川崎市でのこれまでの取組とのつながりがありますか？

本市では、すでに「総合的な学習（探究）の時間」を中心に各学校において「探究的な学び」の実践が行われていますが、これまで取り組んできた、地域とともにある学校づくりの取組や「キャリア在り方生き方教育」における地域への愛着を深める教育活動を発展させながら、地域・社会への参画に向けた資質・能力を育成する「探究的な学び」を、すべての市立学校で実践していきます。

学校では、どのように充実を図るのですか？

「自分（たち）で学び、解決していく学び」を行うために、各学校で地域社会の魅力や課題をテーマとした探究カリキュラムを実施していきます。令和8～9年度は、モデル校が先行実施し、令和10年度から全校展開します。具体的な学習のイメージとして、下記のようなことが考えられます。

地域資源を活用した学習活動の例

地域の魅力や課題の例

地域の緑の保全
地域防災
まちづくりに関わる人々
伝統芸能の継承

①地域課題への取組

地域を流れる川の環境に関する問題を捉え、環境保全に取り組む人々の思いや願いを知り、環境保全に向けて自分達にできることを考える。
計画した環境保全活動を実践し、取組を振り返り改善しながら繰り返し実践する。

②地域への働きかけ

地域の防災の重要性について知り、避難所を開設した際に自分達にできることを考える。身近なものを使って作れる防災グッズづくりに取り組み、地域の防災意識を高めるために、避難所運営会議の方と開設訓練で実践したり、地域の人々に向けたワークショップを実施したりする。

③地域の人々との協働

地域の和菓子屋と協働して、オリジナル商品の開発をする。
どらやきの食感や味、餡子と他の食材の組み合わせなどを繰り返し試作しながら探究し、地域の和菓子屋に提案する。

④ゲストティーチャーとしての活用

学校や地域の魅力を調べ、発信していく活動において、昔から学校に関わっている地域の人々や卒業生、地域の史跡を紹介している人々等と繰り返し関わり、地域の魅力を集めた写真集やパンフレット、コマーシャル動画等を作成する。

⑤地域の人々への発信

地域に伝統的に伝わる祭りやお囃子と出会い、それを継承する人々の思いや願いを知り、お囃子の演奏に取り組み。
完成したお囃子を地域の方々に向けて発表し、地域の祭りやお囃子のよさや楽しさを広めていく。

このように、子どもたちが実際に地域社会に関わり、行動・実践していく学習を行うことで、「次は～したい」「次は～していくべきだ」という思いや願いをもち、探究的に学習に取り組む姿につながっていきます。川崎市では、このような学びを「かわさき探究2.0」として、これまで各学校で行ってきた「1.0」の学びから、さらに探究的な学習が発展的に繰り返される学びへの転換を図っていきます。

(カリキュラムセンター)

一人一人の子どもが主語の端末活用をめざして

◇夏季休業中に教職員を対象としたかわさきGIGAスクール構想に関する希望研修が行われました

かわさきGIGAスクール構想は現在、「一人一人の子どもが主語の端末活用」を合言葉にしながら、各学校でさまざまな実践を行っています。今年度は、夏季休業中に教職員を対象としたかわさきGIGAスクール構想に関する希望研修を合計14回実施し、500人を超える参加がありました。

各種アプリケーションの操作研修や、有識者と教職員が授業改善について語るパネルディスカッション形式の研修、先進的な事例をもとに学ぶ研修など、研修の内容や形式も多岐にわたりました。



令和7年度 かわさきGIGAフェスティバル

◇市立学校の児童生徒を対象に、第1弾（スライドづくり）と第2弾（オンラインタイピングコンテスト）が開催されました。

8月30日（土）には第1弾としてGoogle渋谷オフィスを会場に、川崎市の魅力を伝えるスライドづくりとオフィスの見学ツアーが行われました。また、9月26日（金）～10月27日（金）には、単語部門、短文部門、長文部門の3部門でオンラインによるタイピングコンテストが開催されました。

これらのイベントを通して、素早いタイピングや情報の収集、まとめと発表など、日頃の学習で培われた情報活用能力を発揮し、その力を伸ばそうとする子どもたちの姿が見られました。



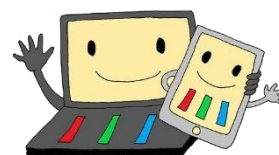
市立学校における教職員の生成AI業務利用始まる！

令和7年10月15日から「利用前研修」の受講を経た教職員による生成AIの業務利用が始まっています。生成AIの利用は、教職員による業務の効率化や質の向上など、働き方改革の一環として始めていますが、将来的に教育活動で適切に活用する素地をつくることも視野に入れています。

児童生徒用GIGA端末の更新準備がすすんでいます

現在、児童生徒用に1人1台配布されているGIGA端末ですが、令和8年9月に新しい端末へ更新予定です。

引き続き学習用端末として大切に扱うことを児童生徒に促すとともに、さらなる活用をめざします。





体験から学びへ



◇ゆうゆう広場における探究活動

ゆうゆう広場は、さまざまな理由で学校に行きにくい、行けない小学生・中学生が通う場所です。興味や関心のある体験活動に参加したり、自分のペースで学んだりすることができます。

創作活動、スポーツ、グループワークや学校以外の人とつながる体験活動を「ふれあいタイム」や「ゆったりタイム」に設定しています。課題へ取り組む足がかりになったり、子どもたちの探究心や主体性、最後までやり遂げようとする責任感を育んだりできると考えています。

ゆうゆう広場での学びを通して、「できる」体験を積み重ねて自己肯定感を高め、「自分で決めた課題」を解決しようとする主体性の確立を目指しています。

ゆうゆう広場号に乗って
いろいろな場所へ出かけます。



8月はサマーキャンプ。
富士山登山で6合目まで
登りました。

イベントでは子供たちが
「何をして楽しもうか」と
わくわくしながら考えます。



(教育相談センター)

児童生徒を支援する仕組み（校内支援体制）

◇児童生徒の支援には校内支援体制を整えてチームで取り組みます

校内委員会では、支援の必要な児童生徒のサポート方法を検討します。支援には1次支援・2次支援・3次支援があります。必要に応じて、校内だけでなく関係機関とも連携して支援を進めます。

校内委員会（運営例）
管理職 教務主任
支援教育コーディネーター
養護教諭 生徒指導担当
学年主任 学級担任
特別支援学級担任代表
学校巡回カウンセラー（小・特）
スクールカウンセラー（中・高）

通常の学級担任

特別支援学級担任

その他教職員

3次支援

個に応じた特別な配慮・支援

- ・通級指導教室での指導
- ・特別な場での指導・別室での指導
- ・特別支援学級での指導 等

2次支援

集団の場での個別的配慮・支援

- ・学級内での個別的な言葉掛け
- ・合理的配慮の提供
- ・入り込み支援、ITによる指導 等

1次支援

集団づくり・授業づくり

- ・教育のユニバーサルデザイン
- ・かわさき共生＊共育プログラム
- ・キャリア在り方生き方教育 等

関係機関

- ・通級指導教室センター的機能（通常学級での支援についてアドバイスします）
- ・特別支援学校センター的機能（特別支援学級での支援についてアドバイスします）

- ・サポーター
- ・総合教育センター 他

総合教育センターでは、各相談を行っています。詳しくはこちら↓↓



(特別支援教育センター)